

芥川龍之介「好色」の自画像

——「大導寺信輔の半生」「或阿呆の一生」への道——

奥野 久美子

一、はじめに

(一) 芥川の〈敗北〉

宮本顯治「敗北の文学——芥川龍之介氏の文学について」(『改造』昭四八)から、村上春樹「芥川龍之介——ある知的エリートの滅び」(『ジエイ・ルービン編「芥川龍之介短篇集」序文 平一九六 新潮社、原著はベンギン・クラシックス「Rashomon and Seventeen Other Stories」2006 で序文も英文)まで、背景こそ大きく異なるものの、芥川龍之介の死を典型的な近代知識人の敗北とすることは変わらぬ共通認識であると言つてよい。宮本は共產主義の文脈でその死を「小ブルジョア・インテリゲンチヤ」の文学の「敗北」とした。村上は「人工的なストーリーテリングと、洗練された文章技術の中に、人間的含羞を忍ばせること、それが芥川の生き方であり、書き方であった。」とし、その人工性、技巧性の源として「現実の、恐怖と苦しみに満ちた世界に直面するよりは、自らを心身共に別の世界に移動させることによって、その虚構性の中に救いのようなものを見いだしたかったのかも

しれない。」と指摘、その死を「一人の知的エリートの敗北を告げる出来事であると同時に、歴史の大いなる変わり目ともなった。」「多くの日本人は、芥川という一人の作家の死に、優れた大正教養人の栄光と、苦悩と、美学と、避けがたい滅びを見いだすことになる。」と論じた(傍線引用者、以下同)。

芥川が浸り、また自らも作り上げた虚構の世界、そして大正教養人(知識人)の世界は、言うまでもなく古今東西の本(書物)から成り立っていた。読書による人格陶冶をめざして大正期の青年たちは盛んに本を読み、読書法、読書論も巷にあふれた。読者層は昭和にかけて知識人以外にも広がり(永嶺重敏「モダン都市の〈読書階級〉——大正末、昭和初期東京のサラリーマン読者」／『出版研究』平一二三)、芥川が亡くなる直前には、円本ブーム等による書物の濫刊は外国にも見られぬ異常な現象だとして、「書籍の洪水」「書籍の機関銃」を戒める言説もあったほどだ(古荘國雄「読書亡国論」／『文化生活』昭二五)。

芥川の死に象徴される近代知識人の滅びとは、上記のような状況下でたとえれば、本に実人生を呑みこまれた人間の悲

劇と言えるかもしれない。人生を実人生からでなく本から学ばしかなかった少年、実人生に本以上の価値を見いだせない青年の姿を、芥川はそれぞれ「大導師信輔の半生——或精神的風景画——」（『中央公論』大一一二）、「或阿呆の一生」（遺稿、「改造」昭二・二〇）の二作品に書き残している。

（2）本と人生——「大導師信輔の半生」「或阿呆の一生」

「大導師信輔の半生」（以下「大導師」）は研究史上、「今迄の彼の作品と全く異なった私小説的手法が採用されている」「保吉」ものに自己の内面が語られていても、決して自己告白的形態をとられたものでないのに対して、「大導師信輔の半生」は自己告白的形態がとられている」（『萬田務「芥川龍之介論」ノート——「大導師信輔の半生」から「点鬼簿」へ——／「大阪城南女子短期大学研究紀要」昭四五・五）とされる一方、「その虚構性も学生時代の旧知などによって指摘されていた。」「虚実皮膜の議論が一応の飽和点に達した」（『芥川龍之介全作品事典』勉誠出版 平二二）「大導師信輔の半生」の項、松本常彦執筆）として、〈自伝〉とは距離を置いた読み方をされているのが現状である。しかしその第五節「本」にある以下の一節は、人生の全てを本から学んだ少年の姿、本の中の人生に同化すること、「私のやうに」いくつもの人生を経た錯覚を得、全能感に至るような陶醉を示

している。これは〈自伝〉ではないにしても、自らの精神史、あるいは典型的近代知識人の形成を語った自画像とみなしてよいのではないか。

本に対する信輔の情熱は小学時代から始まつてゐた。この情熱を彼に教へたものは父の本箱の底にあつた帝国文庫本の水滸伝だつた。頭ばかり大きい小学生は薄暗いランプの光のもとに何度も「水滸伝」を読み返した。のみならず本を開かぬ時にも替へ「天行」道の旗や景陽岡の大虎や菜园子張青の梁に吊つた人間の腿を想像した。想像？——しかしその想像は現実よりも一層現実的だつた。彼は又何度も木剣を提げ、干し菜をぶら下げた裏庭に「水滸伝」中の人物と、——一丈青扈三娘や花和尚魯智深と格闘した。この情熱は三十年間、絶えず彼を支配しつづけた。彼は度たび本を前に夜を徹したことを覚えてゐる。いや、几上、車上、厠上、——時には路上にも熱心に本を読んだことを覚えてゐる。木剣は勿論「水滸伝」以来二度と彼の手に取られなかつた。が、彼は本の上に何度も笑つたり泣いたりした。それは言はば軀身だつた。本の中の人物に変わることだつた。彼は天竺の私のやうに無数の過去生を通り抜けた。イヴァン・カラマゾフを、ハ

ムレットを、公爵アンドレエを、ドン・ジュアンを、メ
フィストフエレスを、ライネツケ狐を、——〔中略〕

かう言ふ信輔は当然又あらゆるものを本の中に学んだ。少くとも本に負ふ所の全然ないものは一つもなかった。実際彼は人生を知る為に街頭の行人を眺めなかつた。寧ろ行人を眺める為に本の人生を知らうとした。それは或は人生を知るには迂遠の策だつたのかも知れなかつた。が、街頭の行人は彼には只行人だつた。彼は彼等を知る為には、——彼等の愛を、彼等の憎惡を、彼等の虚栄心を知る為には本を読むより外はなかつた。本を、——殊に世紀末の歐羅巴の産んだ小説や戯曲を。彼はその冷たい光の中にやつと彼の前に展開する人間喜劇を発見した。いや、或は善惡を分たぬ彼自身の魂をも発見した。(一)内引用者、以下同

さらに遺稿となつた「或阿呆の一生」も、「自伝的性格を持つ遺稿」(海老井英次「詩」と「阿呆」と——芥川龍之介「或阿呆の一生」論一)／「語文研究」昭四四・六のち「芥川龍之介論攷——自己覚醒から解体へ」桜楓社 昭六三・二とされる。「大導師」と絡めて「*芥川の自伝的小説は、『大導師』の続篇が、健康の衰え等で変形して『或阿呆の一生』になり、『蘭車』になり、『河童』になり、最終

的に「西方の人」に結実した」(小澤保博「パトグラフィ」或阿呆の一生)〔芥川龍之介〕／「琉球大学教育学部紀要」平二・八とする指摘もある。その同作で最も有名な一節を含む書き出しの第一節「時代」を引用する。

それは或本屋の二階だつた。二十歳の彼は書棚にかけた西洋風の梯子に登り、新しい本を探してゐた。モオバスサン、ボオドレエル、ストリントベリイ、イブセン、シヨウ、トルストイ、……／そのうちに日の暮は迫り出した。しかし彼は熱心に本の背文字を読みつづけた。そこに並んでゐるのは本といふよりも寧ろ世紀末それ自身だつた。ニイチエ、ヴェルレエン、ゴンクウル兄弟、ダスタエフスキイ、ハウプトマン、フロオベエル、……／彼は薄暗がりと戦ひながら、彼等の名前を数へて行つた。が、本はおのづからもの憂い影の中に沈みはじめた。彼はとうとう根氣も尽き、西洋風の梯子を下りようとした。すると傘のない電燈が一つ、丁度彼の頭の上に突然ぱかりと火をともした。彼は梯子の上に佇んだまま、本の間に動いてゐる店員や客を見下した。彼等は妙に小さかつた。のみならず如何にも見すばらしかつた。／「人生は一行のボオドレエルにも若かない。」／彼は暫く梯子の

上からかう云ふ彼等を見渡してゐた。……

傍線部「傘のない電燈」は先の「大導師」の傍線部、水滸伝を読んでいた「薄暗いランプの光」と見事に対応する。電燈が明治末から大正はじめにかけて急速に普及した（拙稿「芥川龍之介「老年」考」／「別府大学国語国文学」平一八・二、拙著「芥川作品の方法―紫檀の机から―」和泉書院 平二一七 所収）事実もあるが、ランプよりもずっと明るい電燈は近代西洋文芸を背後にして現実の人間を見ると、いかにも「見すばらし」い。またその次の傍線部「ボオドレエル」のあまりに有名な一句に関しては、先掲の宮本顯治が「この言葉程、氏の人生に対する軽侮と芸術に対する信仰を表現してゐるものはない。」としている。このような「彼」の行く末が同作の終り近く、第四十九節「剥製の白鳥」に示される。

〔上略〕それは頭を挙げて立つてゐたものの、黄ばんだ羽根さへ虫に食はれてゐた。彼は彼の一生を思ひ、涙や冷笑のこみ上げるのを感じた。彼の前にあるものは唯発狂か自殺かだけだつた。彼は日の暮の往来をたつた一人歩きながら、徐ろに彼を滅しに来る運命を待つことに決心した。

〔この「剥製の白鳥」こそ、芥川の最後の自画像だといつて

よいであらう〕（海老井英次「芥川龍之介論攷―自己覚醒から解体へ―」先掲）とされるとおりである。芥川が晩年に描いた二作における自画像の重要な要素は、本に実人生を呑みこまれた典型的近代知識人の姿である。「大導師」ではそのことをまだ得意気に語っているふしがあり、全能感すら漂わせるが、「或阿呆の一生」においてはこの四十九節や最終章「敗北」との照応から、悲壮感と「敗北」感が漂う。

さて、序節が長くなつたが、このような近代知識人の「自画像」が「大導師」より数年前、いち早く現れているのが、芥川の現在にはあまり論じられることのない作品「好色」ではないか、というのが本稿の主旨である。以下に「好色」と当時の読書をめぐる知識人のあり方についての諸言説とを絡めつつ論じていきたい。

二、「好色」

「好色」（『改造』大一〇・一〇、初刊「春服」春陽堂 大一二）は平定文（平中）を主人公とし、「今昔物語集」巻二十の一（『校註国文叢書』第十七巻所収（大四・八 博文館）による）の平中と侍従の説話を主な典拠に、エピソードにあるように「宇治拾遺物語」「十

訓抄」の平中説話を参照して書かれた。「春服」収録時に改稿があり、「画姿」などの各節ごとの題もその際加えられた。本稿ではその第一節「画姿」に注目したい。

泰平の時代にふさはしい、優美なきらめき烏帽子の下には、下ぶくれの顔がこちらを見てゐる。そのふつくりと肥つた頬に、鮮かな赤みがさしてゐるのは、何も臙脂（えんじ）をほかしたのではない。「中略」眼は人よりも細い中に、絶えず微笑が漂つてゐる。殆その瞳の底には、何時でも咲き匂つた桜の枝が、浮んでゐるのかと思ふ位、晴れ晴れした微笑が漂つてゐる。が、多少注意をすれば、其処には必しも幸福のみが住まつてゐない事がわかるかも知れない。これは遠い何物かに、憧憬（しやうけい）を持つた微笑である。同時に又手近い一切に、輕蔑（けいべつ）を抱いた微笑である。顔は顔に比べると、寧ろ華奢（かしゃ）すぎると評しても好い。その顔には白い汗衫（あせみ）の襟が、かすかに香を焚きしめた、菜の花色の水干（すみかん）の襟と、細い一線を画いてゐる。「中略」これが古い物語の中から、わたしの前に浮んで來た「天が下の色好み」平の貞文（たけふみ）の似顔である。平の好風（たけふう）に子が三人ある、丁度その次男に生まれたから、平中と渾名を呼ばれたと云ふ、わたしの Don Juan の似顔である。

「好色」は芥川の芸術至上主義とその挫折という文脈で語られることが多い作品で、この「わたしの Don Juan の似顔」も、「芥川の自画像、あるいは希望的自画像といつてもいい」「つきることなく求める者」が、彼の理想像であることにはかわりがない。」（駒尺喜美「芥川龍之介の世界」法政大学出版局 昭四七・一）、「平中を單なる「色好み」に終らせずに、一人の理想主義者として捉えなおし、理想高きがゆえにそれを充填することのできない現実 に於いて、結局はニヒリズムに陥つていく、そうした（Don Juan）的構造を自らの中にも自覺し、平中の〈微笑〉を共有していたがゆえに、芥川は平中を「私の Don Juan」と呼んだのに違ひないのである。」（海老井英次「掲書第七章第四節、初出「文学論輯」昭和五六・三」など、芸術の理想を求め続ける芥川の自画像と讀まれてきた。

ここで注目したいのは、その平中の外貌の描き方である。これについても従来、「独創らしい独創があるかといえば、むしろ疑問で、描かれた平中の容姿は、大和絵の中から抜けて出た美男よろしく、かなり類型的なものでしかない。」（同前、海老井英次氏、「平中の外貌は、「引目鉤鼻」の独特の描写技法が描く、没個性的で類型的な王朝人である。」（下西善三郎「平中好色説話と芥川「好色」／「国語と国文学」昭六一・二）など、瞞を除け

ば平中の外貌にはこれといった特徴がないとされてきた。しかし、傍線部「頭は顔に比べると、寧ろ華奢すぎると評しても好い」は、平安貴族の描かれ方の類型から外れる。芥川が平安時代の衣装を参照するために利用していた「信貴山縁起」の貴族(図1・図2)や「粉河寺縁起絵」の長者(図3)、また我々が平安貴族としてすぐに思い浮かべる「源氏物語絵巻」の源氏の姿(図4)を見ても、「頭」はふつくらした顔と恰幅のよい身体に埋もれて、ほとんど描かれていない。図1の勅使は珍しく頭が見えるが「華奢」ではない。「頭は顔に比べると、寧ろ華奢すぎる」という平中の描写は、明らかに類型的平安貴族像を破るものである。後の展開を考えれば、この描写は「大導寺」における「頭ばかり大きい小学生」に通ずる。つまり、頭ばかり大きく(本による知識ばかりで)、それを支える首は華奢すぎて頼りない(現実の人間、実人生を見つめようとしないう)、今にもその重すぎる頭のために頭から折れてしまいそうな平中像を、「画姿」は表している。

平中がその重すぎる頭のために手痛い失敗をするのが第三節「雨夜」である。平中が侍従をたずね、初めて会えることになり、侍従の居間の隣で待っている場面。

「此処が辛抱のし所だな。もう半時もたちさへすれば、お

れは何の造作もなく、日頃の思ひが晴らされるのだ。(中略)——ああ、胸が痛んで来た。「そ何か侍従なぞとは、縁のない事を考へよう。大分どの局もひっそりしたな。聞えるのは雨の音ばかりだ。ちや早速眼をつぶつて、雨の事でも考へるとしよう。春雨、五月雨、夕立、秋雨、……秋雨と云ふ言葉があるかしら? 秋の雨、冬の雨、雨だれ、雨漏り、雨傘、雨乞ひ、雨龍、雨蛙、雨革、雨宿り、……」(中略)——平中はとうとうくら闇の中に、ちつと独り横になつた、恋しい侍従を探り当てた。／これは夢でも幻でもない。侍従は平中の鼻の先に、打衣一つかけた儘、しどけない姿を横たへてゐる。彼は其処にみすくんだなり、我知らずわなわな震へ出した。が、侍従は不相変、身動きをする気色さへ見えない。こんな事は確か何かの草紙に、書いてあつたやうな心もちがする。それともあれは何年か以前、大殿油の火影に見た何かの画巻にあつたのかも知れない。／「忝ない。忝ない。今まではつれないと思つてゐたが、もう向後は御仏よりも、お前に身を捧げるつもりだ。」／平中は侍従を引き寄せながら、かうその耳に囁かうとした。が、いくら氣は急いでも、舌は上顎に引ついた儘、声らしいものは口へ出

ない。〔中略〕「お待ちなさいまし。まだあちらの障子には、懸金が下してございせんから、あれをかけて参ります。」

／平中は唯領いた。侍従は二人の褥の上に、匂の好い暖みを残した儘、そつと其処を立つて行つた。／「春雨、侍従、弥陀如来、雨宿り、雨だれ、侍従、侍従、……」

／平中はちやんと眼を開いたなり、彼自身にも判然しない、いろいろな事を考へてゐる。すると向うのくら闇に、かちりと懸金を下す音がした。／「雨龍、香炉、雨夜の

しなだめ、ぬは玉の間のうつつはさだかなる夢にいくらもまさらざりけり、夢にだに、——どうしたのだらう？

懸け金はもう下りたと思つたが、——「〔中略〕平中、平中、お前はもう天が下の色好みでも何でもない。——」／平

中は障子に寄りかかつた儘、失心したやうに呟いた。

まず侍従との対面を前に、平中は「春雨……」などの歌語的、類書知識をたぐり寄せ、対面の緊張を和らげようとしている。例えば「春雨、五月雨、夕立、秋雨、……秋雨と云ふ言葉があるかしら？」の部分では、「古事類苑」天部三（神宮司序 明四一・六）を開けば見出しには「小雨」「大雨」などのあと「春雨」「卯の花くたし」「五月雨」「夕立」がこの順で続く。本文には「八雲御抄」から「春さめ 小雨 むらさ

め ながめ しはくり ゆふだち こし雨○中略 よこさめ

源氏曰、野分時也、さみだれ〔中略〕光忠がききさめなどいへるたぐひは、おかしき事なり」と引かれている（「八雲御抄」

にこの秋雨の指摘があることは筑摩書房版「芥川龍之介全集第二巻」（昭和四四）所収「好色」の注釈にある）。

そして侍従との間の対面を果たしたが、平中は「夢でも幻でもない」現実の侍従の前に、「草紙」「絵巻」のことを考え、声すら出せない。侍従に逃げられた原因は、平中自身が、〈本〉の世界から出て現実の侍従と向き合おうとしなかつたことにある。

この「草紙」や「画卷」について、千石隆志「龍之介覚え書・（三）『好色』についての考察」（『Soliloquy』昭六三・八）は「平中は無意識裡に伝統の型を踏まえ、好色のふるまいに及んでいた。」「己の行為が孤立したものではなく、伝統の内に、いま正に生き生きと現前している。その意識が平中の悦びを増幅」させているとする。栃山美知子「『眼鏡』と『好色』——ボウと芥川の恋の悲喜劇——」（『大谷女子大学紀要』平一七・二）は、「現実足間に妨げられ」、「フィクションの世界が立ち上がってくる。」とし、本作もボウの「眼鏡」の主人公も、「恋を恋するのみで相手を見なかつた」のだと指摘している。し

かしこの場面での平中に伝統の内にある自分を悦んでいるような余裕は見えないし、平中と現実の侍従を妨げたのは「闇」でもない。平中の頭の中にあつて離れない「草紙」や「絵巻」、つまり肝心の現実の侍従を前に本の世界へ逃げ込んだ、実人生に本にまさる価値を見出せなかった平中自身である。

そして第四節「好色問答」では、現実の女でなく「巫山の神女」を追ひ求める平中が範実により「天才」として語られ、終章の「まりも美しとなげく男」では、侍従の徹底して自身の自分を見せない策略により、ついに平中は現実の侍従に至る通路を失い、仏倒しに倒れる。全ては「雨夜」の夜、侍従を前に本の世界へ逃げ込んだ平中自身から出たことであり、その予言は「画姿」で示されていたことでもある。

「好色」の平中が芥川の自画像というだけではなく典型的な近代知識人である、という読みはあるいは自明とする向きもあろうし、従来の「好色」論においてもなされていた。『芥川龍之介大事典』（志村有弘編 勉誠出版 平一四七）「好色」の項（山根由美恵執筆）では本作第二節の「一体こんな事は考えてみると、だんだんわからなくなる」の部分を引き、「知識人の病に冒されている人間」とする。しかし第四節「好色問答」における（平中天才論）の存在感が大きく、芥川の芸術至上主義と

その挫折という文脈が前面に押し出されてきたために、冒頭の「画姿」に仕組まれた知識人平中の姿は見落とされてきたし、本作を近代知識人平中の悲劇という文脈を軸に読むことも充分にはなされてこなかった。この文脈でとらえれば、本作から「大導寺」「或阿呆の一生」へつながる芥川の自画像の道筋が見える。

次節では、作品をしばし離れ、当時の知識人と読書をめぐる緒言説を概観して、本稿の主旨を補う手段としたい。

三、本と実人生をめぐって

本の世界に閉じこもり実人生や生身の人間と向き合えない知識人が描かれた例は、古今東西、把握しきれないほどあるだろう。日本近代文学史上代表的な例と言え夏目漱石が描いた「行人」の一郎や「道草」の健三があげられる。「行人」（『東京朝日新聞』『大阪朝日新聞』大正二・三・六・大正二・一・五、引用は東京版、ルビ略）の「兄」第二十・二十一節における一郎と弟の二郎の会話。

「御前^{ひな}他の心が解るかい」（中略）「御前は幸福な男だ。恐らくそんな事をまだ研究する必要が出て来なかつたんだ

らう」〔中略〕「書物の研究とか心理学の説明とか、そんな廻り違い研究を指すのぢやない。現在自分の眼前に居て、最も親しかるべき筈の人、其人の心を研究しなければ、居ても立つても居られないといふやうな必要に出逢つた事があるかと聞いているんだ」〔中略〕「兄さんは餘^{あま}り考へ過ぎるんぢやありませんか、學問をした結果。もう少し馬鹿になつたら好いでせう」／「向ふでわざと考へさせるやうに仕向けて来るんだ。己の考へ慣れた頭を逆に利用して。何うしても馬鹿にさせて呉れないんだ」〔中略〕「あ、己は何うしても信じられない。何うしても信じられない。たゞ考へて、考へて、考へる丈だ。二郎、何うか己を信じられる様にして呉れ」

また「道草」〔東京朝日新聞〕「大阪朝日新聞」大四六・三・九一四
引用は東京版、ルビ略）の第三節。

健三は實際其日々々の仕事に追はれてゐた。家へ歸つてからも氣楽に使へる時間は少しもなかつた。其上彼は自分の読みたいものを読んだり、書きたい事を書いたり、考へたい問題を考へたりしたかつた。それで彼の心は殆ど余裕といふものを知らなかつた。彼は始終机の前にこびり着いてゐた。〔中略〕自然の勢ひ彼は社交を避けなけ

ればならなかつた。人間をも避けなければならなかつた。彼の頭と活字との交渉が複雑になればなる程、人としての彼は孤独に陥らなければならなかつた。彼は臆氣にその淋しさを感ずる場合さへあつた。けれども一方ではまた心の底に異様の熱塊があるといふ自信を持つていた。だから索寞たる曠野の方角へ向けて生活の路を歩いて行きながら、それが却て本来だとばかり心得てゐた。温かい人間の血を枯らしに行くのだとは決して思はなかつた。

そして同作第二十九節、健三と青年との会話にも以下のようにある。

「牢獄とは何です」／「学校さ、それから図書館さ。考へると両方ともまあ牢獄のやうなものだね」／青年は答へなかつた。／「然し僕が若し長い間の牢獄生活をつゞけなければ、今日の僕は決して世の中に存在してゐないんだから仕方がない」

一郎も健三も學者であり、健三は學問、本の世界を「牢獄」に例えている。

學問や本への没入が生身の人間性や人との関わり、実人生を奪つてしまふという問題は、明治大正期の読書をめぐる評

論類においても論じられていた。以下、諸言説を見てみたい。

大正末年に書かれた野島辰次「読書派と非読書派——文学者と読書に就いて——」(「郊外」大正一〇)は、著名作家を読書派と非読書派(実験派、体験派とも)に分け、前者には正宗白鳥、武者小路実篤、菊池寛、芥川、山本有三を分類。後者には徳田秋声、里見弴、中村武羅夫、久米正雄、久保田萬太郎を分類している。同じ読書派においても白鳥と芥川とは芥川のほうが作品に及ぼす読書の影響と効果が「ずっと濃厚」であり、そのことが「芥川氏の作品が、ともすればわれわれの頭脳へは響くが、心臓へはびつたり訴へて来ないこと」の原因だとする。そして「読書派の文学者が、もつと実験なり体験なりを尊重するやうになり、一方非読書派の文学者が、もつと読書を心がけるやうにする、さうした暁にこそ、ほんとの意味での傑れた文学が生れるのではないだらうか」とし、「読書派を街頭へ送り出せ、非読書派を書齋へ追ひ込め」、それが「文学の更正」につながると結論づける。

このような読書か体験か、という言説は当時多くなされ、近松秋江は「読書と現実」(「不同調」昭二一〇)において、読書型の作家について「先日死んだ芥川龍之介氏が読書家であつたことも周知の事実だが、芥川君の小説を読むと、沈痛な人

間生活については、多く教へられ、又暗示されるところのもの
はなかつたやうである。高雅な趣味の人としての文人芥川君を失つたことは、甚だしく寂寞を感じしめるが、小説作家としての芥川君を失つたことは、今後の小説界にたいした影響はないだらう。」「吾々、現実の人間生活を書かうとする者にとつては、それが、よしや、いつまで待つても傑作は成し得ないにしても、常に現実を観察することに於いて、小説道に精進するのほかはないのだ。勿論、古今の作を読んで啓発せられるところは、少なくはなからうが、それは、ほんとの啓発、暗示の一端に過ぎない。吾々は修養の大部分を自然——現実の觀察に置くのほかはない。」と、私小説作家らしい見解を述べている。それと同時に、先の野島辰次の論で「読書派」に分類された菊池寛は、「創作をなすにあたつて二つの方法がある。云ふまでもなくそれは体験と読書である。しかし体験といふものは、人為的にはさう多く積むことは出来ない。」「創作修行のうち幾らでも勉強の出来るのは学問読書である。」「苟くも創作に志す程の人は、出来るだけ多く古今東西の作品を読んで貰ひたい。」「色々の作家の観方、考へ方のうち最も自分に共鳴する物を借りて来て、自分の周囲の人生に当て嵌めて見るのである。それが人生を作家的に観る初

めである」と云つてよい。」「(体験と読書)／『創作時代』昭二九」と述べている。

読書を修養の第一とする一方で、それに偏らぬ体験を積むことが重要だとする論は明治期からさまざまな読書論において重ねられてきた。単行本で刊行された読書論を、ゆまに書房刊『近代「読書論」名著選集』(全十四巻、平六四一六)から概観すると、同選集第一巻所収、澤柳政太郎『読書法』(明二五五 哲学書院)では諸外国の著名人の言を引き、書物を「善良の朋友」に例え、「書を読むに当りては常に賢者と談論するを得へし」と雖も読書の外に出つれば遂に愚人との交際を免れず」と、現実の人間との交際に倦み、本の世界で賢人と付き合うことを喜びとする。しかしただ片端から読み続けるだけでは何も身につかぬと、「読書法」の必要性を説く。同選集第五巻所収、内村鑑三編『偉人と読書』(明三三・九 山縣図書館)でも、同様の外国の偉人の言を引き、ジョン・ムーアの「読書を嗜むの最大利益は屢々吾人を悪友の仲間より遠ざくるにあり、何となれば家に在りて常に必ず善き友を得能ふ人は、外に出て悪き人と共に歩み且つ止まるの要なければなり。」という言葉もある。これらのように、本を良友、良師とし、現実世界の愚人や友人にすら勝る、とする例えは同選集第六

巻所収川上五平編『読書作文法』(明三三・九 内外出版協会)、同第九巻所収リチャードソン著『最新読書法』(明三九九 実業之日本社)など、明治三十年代に書かれたり紹介された読書論に多く見られる。一方で読書論には読書の弊害に言及するものも数多く、同選集第十三巻所収高橋五郎訳『世界文豪読書観』(明四五・四 内外出版協会)では、シヨールペンハウエルの「読書について」の要約をしており、読書に費やす時間が多くなるほど人は自分の頭で考えなくなり、「自ら思想する力を段々と喪ひゆく」「恰も常に馬にのみ乗る人が遂に歩むことを忘る、が如し」との説を紹介している。シヨールペンハウエルのこの著名な論は例えば柏木衛門「読書乎不読書乎」(『学燈』大五・一二)や生田春月「秋燈読書感」(『文章俱樂部』大一一・一二)などにも引用され、影響力があつたようだ。また同選集第十四巻所収加藤咄堂『読書法』(大五・九再版 東亜堂書房)は読書の利を説きながらも「これに耽溺するの弊は自修を妨げ人格を損ずることも少なくない」と警告する。

雑誌類に掲載されたさまざまな読書論においても、こと文学に關しては「文学者たらんとする若き人々よ、諸君は読書をしなければいけない、博く読書する心掛けがなければいけない。新しい時代の、新しい文学者にならうとする人々には、

殊に読書が必要である。」(鳥場孤嶽「最も理想的に読書するには」／「中央文学」大六・五)というように、読書を第一とするものもあるが、読書に耽溺することの弊害や、実人生での体験を疎かにするなと説く論も多い。以下にいくつか例示する。

「書物の上で調べるよりか、実地に就て見た方が人情風俗を明にすることが出来る、」(「生きた知識は実地に就かなければ得られぬ。真に人間と云ふものを知らなければ、小説を読んで分らぬ。若し吾人が実生活に於ける人間を知らなかつたら、小説に描かれてある人生の真偽如何を判断し得ないではないか。」(篠川生「ブランドスの読書論」／「学燈」明四五・五*デンマークの批評家ブランドスの説を紹介)

「酒に飲まれる如く書に読まれて禍を受ける恐れがある。特に女の読書家に此の弊が多いやうに思ふ。」(「悉く書を信すれば書無きに如かず、読書却て有害となるのである。」(宮田修「読書の態度と将来の婦人」／「女の世界」大五・一〇)

この宮田のような論は大正の終りにかけてさらに高まり、「変態心理」大正十三年十月の時論「書を読まざる日本人」(無署名)も同じ表現を使って「今日の日本人は、書を読んでゐるのではなく、書に読まれてゐるのに外ならない」「悉く書を信ぜば、悉く書無きに如かずを古聖賢は云つた」と述

べている。さらに例示を続ける。

「(読書ばかりしていると自ら考えなくなるといふショーペンハウエルの説を引用した後で)世には読書万能信者があつて、読書の効益を過大に妄信し、就中学者は読書家であらねばならず、読書家は必ず学者であるやうに思ふものがある。ショーペンハウエルの如上の説は恠ういふ読書万能の盲信者を戒むるに足るが、其実書籍崇拜の時代は最早過去つてをる。」(先掲 柏木衛門「読書乎不読書乎」／「学燈」大五・一二)

「文芸美術等が人生の為に存在するものであつて、人生が文芸美術等の為に存在するのでないけれども、こゝではかりに実生活の上のさまざまな経験を、文学上製作に対する必要の前提であるといたします。この場合、文学者として立つと志す者は、いろいろの世間を見て来なければならぬ。常識と習俗の道德とから非難されるやうな生活へも^{マダ}むぐり込んで見なければならぬ。と云ふやうな考が出て参ります。」(生田長江「文学に志す青年にまで」／「文章俱樂部」大六・一)

※「書物の中に十年は過ぎたり——しかも最も悪しき書物の中に！そは弱き心をより弱くしぬ、我が最もよき青春はかくて過ぎたり、あゝ我は書物に読まれぬ——されど書物の外に、何が我をば慰めたる 生活は書物の与ふるも

のをだに我に与へしか？ 汝悪しき書物よ、尚も我を吞めか

し！」（生田春月「読書子の告白」／「新潮」大七一）

「読書は吾々の思索と体験とを補ふことは出来るが之に代ることは出来ない——読書の意義を考へるとき、吾々は第一にこの事を記憶して置かなければならない。」吾々にとつて最上の意義を持つてゐるのは、生活であつて決して読書ではない。」充分に理解せられぬ記憶の集積と、腹の底から納得の行かぬ盲目的な信仰とは、吾々の生の流動を妨げる石ころのやうなものである。（中略）此処に、哲学や文芸の方面に於いて、読書を第一と考へることの特別な危険がある。／吾々の生活の発展の最初の基盤となり、吾々の思索の第一の出発点となるものは何であるか。それは吾々自身の体験である。我々自身の体験の外には何処にもあることを得ない。」（阿部次郎「読書の意義とその利弊」／「婦人公論」大一〇五）

「読書から得た知識は固形的で流動性を具へて居ない他人と接触し交渉し摩擦して流動性に変じて始めて社交等から得た知識のやうに社会の融通物となるのである其れゆへ専ら読書に頼て知識を得た人は丁度永らく大洋に航行して新鮮な食物を携らない結果一種の壞血病に罹つた船乗人に等しく病的の人となつて終ふ」（山脇玄「名士と読書」アンケートへの回答／「日本」

大一一七）

「丸善などで洋書の前に立つて敬意を払つてゐる連中を見ると、彼等は所謂世界的威名でをどし付けられてゐる弱虫のやうな感じがしてならない。」諸君は青年時代の芥も淳も悉飲みほさねば駄目だといふことを知らねばならぬ。何でも青年は青年時代を徹底的に生きることだ。諸君は書齋にむぐり込んで「文字、文字、文字」の薄ぼんやりした影ばかり追つていけない……須く鳥歌ひ花笑ふ野原へ出ることだ。諸君は叛逆するもよからう、興奮して笑ふのもよからう、又泣くのもよからう、何処までも諸君は人生の歓楽を極めることだ。若し諸君が笑ふ時に笑はず泣くときに泣かないならば、後年諸君が笑つてみたい泣いてみたいと思ふ時が来ても、諸君は笑ふことが出来ないであらう泣くことが出来ないであらう。」（野口米次郎「書齋を出てよ」／「新潮」大一一三）

この野口米次郎の論を、「或阿呆の一生」第一節、丸善の二階にいる「彼」は間違いなく一笑に付すだろう。しかし同作終節「敗北」の「彼」には笑う力もないのではないか。

以上のように、読書による人格陶冶をはじめとする教養主義の中にあつた大正期知識人の間でも、実生活との対峙や経験を欠く読書偏重には弊害を説く声が多かつた。一方で生田

春月の詩（※印）のように、書物に吞まれることが「弱き心をより弱く」するとわかつていながら、書物より魅力的な実人生がどこにあるのか、と嘆いたのが「大導師」の信輔であり、「或阿呆の一生」第一節の二十歳の青年であった。ちなみに生田春月は芥川と同じ明治二十五年三月生まれ。生立ちや学歴は芥川と全く違い少年時から苦勞を重ねたが、やはり苦しい現実から逃げるように本の世界に耽溺し、このような詩も残した。そして芥川の自殺三年後の昭和五年、やはり自殺している。中野重活は「芥川龍之介」（『文学講座』第一巻「文学の問題」／昭二六 筑摩書房）において、「芥川の自殺は、北村透谷、有島武郎、生田春月あるいはこれに原民喜をとみなわせたその線に立つものといえる。」とする。春月の作品と人生にも、芥川の、大正知識人の、「敗北」の縮図が見える。

四、おわりに

芥川氏が本なんかばかりに嚙りついて、実生活を眺めないからこんな、遊び」とのやうな小説が生れるのだ。（中略）氏がたつた一つ救はれる道は、本なんてものを破棄して終つて、民衆の渦の中へ身体を投げ込んで終ふこと

である。（松本）弘二「小説『好色』」／『種蒔く人』大正一〇・一二

これは、「好色」の同時代評である。社会主義の立場からの（インテリゲンチヤ）批判ではあるが、「好色」が本に実人生を吞まれた知識人の悲劇を描き、「大導師信輔の半生」「或阿呆の一生」へと続く芥川の（自画像）のはじまりであるととらえれば、その意味では的を射た評といえる。

以上論じてきたように、「好色」は、本と人生をめぐる大正期の諸言説の中に置き、近代知識人平中の悲劇を軸に読み直すことにより、「大導師信輔の半生」「或阿呆の一生」へ続く芥川の自画像として再評価することができる。またこれは現代社会と重ねることにより、芥川の死の現代的意義を問うことにもつながってゆくであろう。

（注）「点心」の中の一項「むし」（『新潮』大正一〇・三）に、平安朝を舞台とする小説に虫の垂衣を描いたのは、「信貴山縁起」「粉河寺縁起」なぞの画卷物」によつたためだとある。

*芥川作品の引用は『芥川龍之介全集』（岩波書店・第二刷）により、「好色」は第八卷（平一九・八）、「大導師信輔の半生」は第十二卷（平一九・一二）、「或阿呆の一生」は第十六卷（平二〇・四）、「点心」は第七卷（平一九・七）。

*本稿は平成二十五年科学費補助金（「近代説話」の研究―明治大正期の実録、実記、講談本から歴史小説、大衆文学へ―）（研

究課題番号25770088)による研究成果の一部である。

(大阪市立大学大学院准教授)



図1



図3



図2



図4

図1図2は「信貴山縁起」から貴族

(『日本絵巻大成4』中央公論社 昭五二・四)

図3は「粉河寺縁起」から長者

(『日本絵巻大成5』中央公論社 昭五二・六)

図4は「源氏物語絵巻」から薫を抱く源氏

(『日本絵巻大成1』中央公論社 昭五二・五)